第 73 回　日本の都市計画の始祖は渡来人？

Ｉ Ｔ生

京都嵯峨野の風景に渡月橋は欠かせないが、すぐ北側に、橋に並行して堰（せき）が設けられている。この堰の原型（水害のたびに改修されている）は、１４００年ほど前に築かれていたのではないかとされる。

築いたのは、朝鮮半島からの渡来人とされる秦氏だ。秦氏の名は、日本書記の５世紀あたりの記述に登場するが、渡来時期はそれ以前で、書紀に記述されたころには、日本各地に定住していたとみられる。

1400 年前に設けられてとされる桂川の堰。この京都嵯峨野の開拓がのちに平安京を生むことになった

この渡来系の人たちは、それ以前から日本に住んでいた豪族らと争ったという記録はないらしい。古代の研究者によると、農耕や養蚕など農業をなりわいとしていた「開拓系移民」だという。つまり、戦乱を避けて朝鮮半島から渡ってきており、それゆえに、移住先の文化と融合し、一方、中国大陸から伝来した、農耕、土木技術にたけており、日本におけるいわば文明人の顔のみで定住していた。

その秦氏の勢力は関東から畿内、瀬戸内海に及んだという。その秦氏の一大拠点が、奈良の都に近い、京都・嵯峨野だったのである。この京都・嵯峨野の秦氏の拠点では、丹波地方から農耕に必要な栄養価の高い豊富な水を供給する桂川をせき止め、中洲もつくり、嵯峨野一帯から宇治にかけて、水路を巡らせ広大な耕作地をつくりあげた。各地との交易も盛んで、潤沢な資金をもつ秦氏は、平安京建設時の最大のスポンサーとなった。いまだに京都人の間では、京都の生みの親として名が挙がるのが「桓武天皇」と「秦氏」だという。

秦氏の開拓地はそのほかの地でも同様で、大きな河川の恵みをコントロールし、拡大していった。いわば、現在にいたるまでの日本の都市形成の源をつくったといえる。

河川管理にあたっては、災害による氾濫後の復旧作業の手順（各階層の人の役割）まで決めていたとの記録も残る。こうした記録をみると、秦氏の開拓精神は、自然を克服することを目的としていたのではなく、自然の恵みを享受することに重きを置き、災害が起きることを前提に、それをやり過ごすことで、各地で生き延びてきたといえる。こうした日本古来の精神は、明治以降の急激な欧州流近代化が進むことで、喪失され、それがゆえに、ただ自然に翻弄されるばかりの日本人といったのは、寺田寅彦師だが、今になって日本古来の精神を取り戻せという声が上がってきてはいるものの、取り戻すには相当な時間を要すると、今夏の豪雨災害をみて思うのだ。

（令和 3 年 8 月）